

(国立大学法人用)

平成29年度「学校における交流及び共同学習を通じた障害者理解(心のバリアフリー)の推進事業」成果報告書

団体名

国立大学法人秋田大学

I 概要

1 事業の概要

1 主な対象校

秋田大学教育文化学部附属四校園（特別支援学校（児童生徒 63 名）、附属幼稚園（幼児 93 名）、附属小学校（児童 552 名）、附属中学校（生徒 437 名））

2 事業の目的

- ・ 障害のある子どもとない子どもの、発達段階に応じた継続的な交流及び共同学習や障害者理解に関わる学習を通じて、自己理解や他者理解、多様性を尊重する心を育み、障害のある人への理解を深める。
- ・ パラリンピックの種目になっている障害者スポーツへの関心を高める。

3 事業の内容

- (1) 附属特別支援学校の児童生徒と附属幼稚園の園児とは竿燈交流等、小学校の児童とは給食交流、手打ちうどん作りと会食などの学年ごとの活動、中学校の生徒とはポッチャ等を通じた交流及び共同学習を行った。
- (2) 交流及び共同学習の事前学習として小学校で「よつば学習」を行った。また、中学校では東京パラリンピック金メダリストによる講演を行った。
- (3) アンケートにより、交流及び共同学習や「よつば学習」、講演等の成果を確認した。

2 事業の成果

(文化・芸術)

1 附属幼稚園との交流及び共同学習

- ・ 高等部1年生とのサツマイモ植えとサツマイモ掘り
高等部1年生が幼稚園児に植え方を教え一緒に植えたり、手作り紙芝居でサツマイモ掘りへの関心を高めたりした。優しいお兄さん・お姉さんとして交流をスタートできた。
- ・ 中学部・高等部生による竿燈集会（演技披露とふれ合い竿燈）
秋田竿燈まつりの前に幼稚園児に竿燈を披露し、太鼓のたたき方を教えるなど交流した。

2 附属小学校との交流及び共同学習

- (1) 小学部と小学校の児童は小学生の6年間、毎年数回ずつ交流及び共同学習を重ねている。小学校では給食交流と小学校児童が考えた内容（遊び等）で交流し、特別支援学校では小学部の児童が生活単元学習で繰り返し取り組んでいる学習活動に小学校の同学年の児童を招待した。特別支援学校の児童は活動に見通しをもっているため、自信をもって小学校の児童と協力する場面があり、交流が深まった。

○ふたば学級1・2年生 単元「おはなしふたば」～「がらがらどん」等の劇遊びとダンス

○わかば学級3・4年生 単元「わかばのうどん」～協力して手打ちうどん作りと会食

○あおば学級5・6年生 単元「あおばランド」～手作りの的あて・ボウリングなど

- (2) 「よつば学習」（障害者理解に関わる学習）の取組

「よつば学習」とは、附属小学校の教育課程に位置づけている障害者理解に関わる学習である。低学年段階の「よく知る」、中学年段階の「つながる」、高学年段階の「バリアフリー」の頭文字をとって、「よつば学習」と命名した。

低学年で互いをよく知り、中学年ではどんな関わりができるかを考え、関わる楽しさや喜びを味わい、高学年では障害のある人の困り感を体験し、共生について考え行動する姿を目指して、段階的に障害者理解を進めている。特別支援学校の教員と小学校の教員が共同で指導している。今年度は、学年ごとの交流及び共同学習の事前学習として、特別支援学校の児童の紹介とともに、年齢や理解の状況に応じた障害者理解に関わる学習を行った。

＜事前学習の学年ごとの内容例＞

1 学年	2 学年	3 学年	4 学年	5 学年	6 学年
【よく知る】 ☆仲よくなろう ・特別支援学校の紹介 ・友達の名前他	【よく知る】 ☆もっと仲よくなろう ・好きなこと探し ・体験しよう（鉛筆アップダウン）	【つながる】 ☆自分の良さを知ろう ・自分の好きなこと、得意なことを紹介しよう ・一緒に活動するために	【つながる】 ☆クラスの友達の良いところをさがそう ・自分を知る ・友達を知る	【バリアフリー】 ☆困り感のある人を理解しよう ・疑似体験（読む、書く、感じ方） ・「き・こ・う」の実践	【バリアフリー】 ☆みんなで活動しよう ・困難さや特性を理解しよう ・ユニバーサルデザインの意味
特別支援学校の友達の紹介・特別支援学校での学習の内容など					

(3) 事後のアンケートから

○小学校児童の「よつば学習」への感想

- ・クラスの友達から自分の長所を書いてもらうととてもうれしいことが分かった。わかばの人たちの長所（特徴、特技、美点）をたくさん見つけたい。（小4）
- ・「き・こ・う」（気付く、声をかける、動く）の3つを意識し、相手の気持ちを考えて行動したい。いろんな人にその人らしさがあるなど、人によって困ることが違うことが分かった。左手で文字を書くのが難しく、困り感が体験できた、（小5）

○5年生の児童の作文「あおば学級との交流を通して」より（抜粋）

- ・先生があおばさんとの交流を楽しくする「こつ」を教えてくれたとき「特別あつかいじゃなく、同じように楽しみ、思ったことは実際に声に出してあげるといいよ」とアドバイスをもらい、最初はどうかやればいいかなどとても迷って不安だったけれど、みんなでゲームをやっているうちにゲームで盛り上げながら応援したり、みんなでハイタッチするなど、だんだん不安が無くなっていきました。

○小学校の教員の「よつば学習」と交流及び共同学習への感想等

- ・85%の教員が「よつば学習は児童たちにとって分かりやすい内容だった」、70%の教員が「職員にとっても参考になる内容だった」と評価した。
- ・感想は「障害理解を理論と実践の両面から子どもたちが経験できる系統的なプログラムは、非常に有意義」「特別支援学校での取組（のれん・ランチョンマット・箸置き・うどん作り）を知り、子どもたちは、わかば学級の友達の頑張りに驚いていた。相互理解の場として有効」「よつば学習と給食交流を通して、子どもたちが、障害がある同年齢の児童と積極的に関わるとともに、必要な支援（ケア）を考えている様子が見られ、とてもよかった」等。

(スポーツ)

3 附属中学校1年生とのボッチャを通じた交流及び共同学習及び講演会

- (1) 特別支援学校の中学部生と中学1年生が体育でボッチャを行った。中学生は初めて体験する種目だったため、DVDでルールの予習をして臨んだ。障害のある人もない人も同じチームの一員として応援し合いながら、ボッチャを楽しんだ。
- (2) 1年生の1クラスが、特別支援学校とのボッチャの経験を生かして、秋田県特別支援学校総合体育大会のボッチャ競技の審判やアシスタントとして参加し、

秋田県立支援学校天王みどり学園や秋田きらり支援学校の児童生徒と交流した。

- (3) 1年生 144 名を対象に全盲の東京パラリンピック金メダリストによる講演会を行った。
・講師 竹内 昌彦氏 演題「見えないから見えたもの」

(4) アンケートから

- ・ボッチャがパラリンピックの種目であることを 83%の生徒が初めて知り関心をもった。
- ・障害者との交流経験は 85%の生徒が「ある」と答えた。交流後、90%の生徒がボッチャは楽しかったと答えた。障害者との交流については、63%が「もっと多く交流したい」37%が「今回の程度の交流を続けたい」と答え、ボッチャに対しても交流に対しても肯定的な評価が得られた。
- ・感想としては、「障害があっても、スポーツやゲームを楽しむということは変わらないと感じた。同じチームになって一緒にゲームをすることで、障害がある、ないに関係なくみんなが楽しむことができると思った」など。講演の感想では、視力に障害があることを乗り越えてたくましく生きていることや社会に貢献するため自分にできることを通じて一生懸命努力する生き方についての共感を伝えるものが多くあった。

4 成果

- (1) 幼児児童生徒の発達段階を考慮した継続的・計画的な交流による体験や知識的理解を通じて、徐々に相手のことを考えて関わり、必要に応じて手助けできる態度が形成された。
- (2) 交流及び共同学習には、共同的な学習場面（役割分担や協力の必然性のある活動等）とビデオ等を活用した事前学習により当日への見通しと期待をもたせるなど、双方が主体的に参加できる工夫により、短時間でも効果的な交流及び共同学習ができた。
- (3) 「よつば学習」には、学年段階に応じて「相手と心を合わせるエクササイズ」「関わり方を考える」「自分や友達の長所発見」「障害による困り感を知る」など交流場면을意識した体験的な学習内容を設定した。それにより、児童が障害の有無にかかわらず他者を思いやり、相手の立場に立った行動について考えるきっかけになった。
- (4) 交流及び共同学習の前には教師間の丁寧な打合せを実施し、本校の児童の実態や配慮事項などを伝えた。それにより、教員が障害のある児童を理解して関わり、その姿は小学校の児童にとってのよきモデルとなっていた。
- (5) 障害者理解の推進を秋田大学教育文化学部附属学校園のビジョン、アクションプランに位置づけるとともに、学校間をつなぐ担当教務等の連絡会により組織的・計画的な取組ができた。さらに、学校報で保護者への理解啓発も効果的であった。

3 事業の課題とその解決のために必要な取組

(スポーツ)

- ・ボッチャはルールが分かりやすく、障害の有無にかかわらず楽しむことができたが、短時間のゲームを通じた交流で十分に会話の時間がとれなかった。より深い交流になるように内容を検討し、年間指導計画に位置づけ、計画的に進める。

(文化・芸術)

- ・附属小学校では「よつば学習」と交流及び共同学習の後に感想アンケート等で評価したが児童の日常的な行動の変容につながっているのか十分に評価しきれていない。事前に担任に評価の項目等を伝え、担任が評価の視点をもってエピソードを蓄積するなど、評価を計画的に行っていく必要がある。
- ・附属学校園の保護者への理解啓発は重要である。交流の様子については各校の学校報等で伝えたが、定期的に通信を出し保護者への参観を促すなど、保護者の理解を深めたい。